

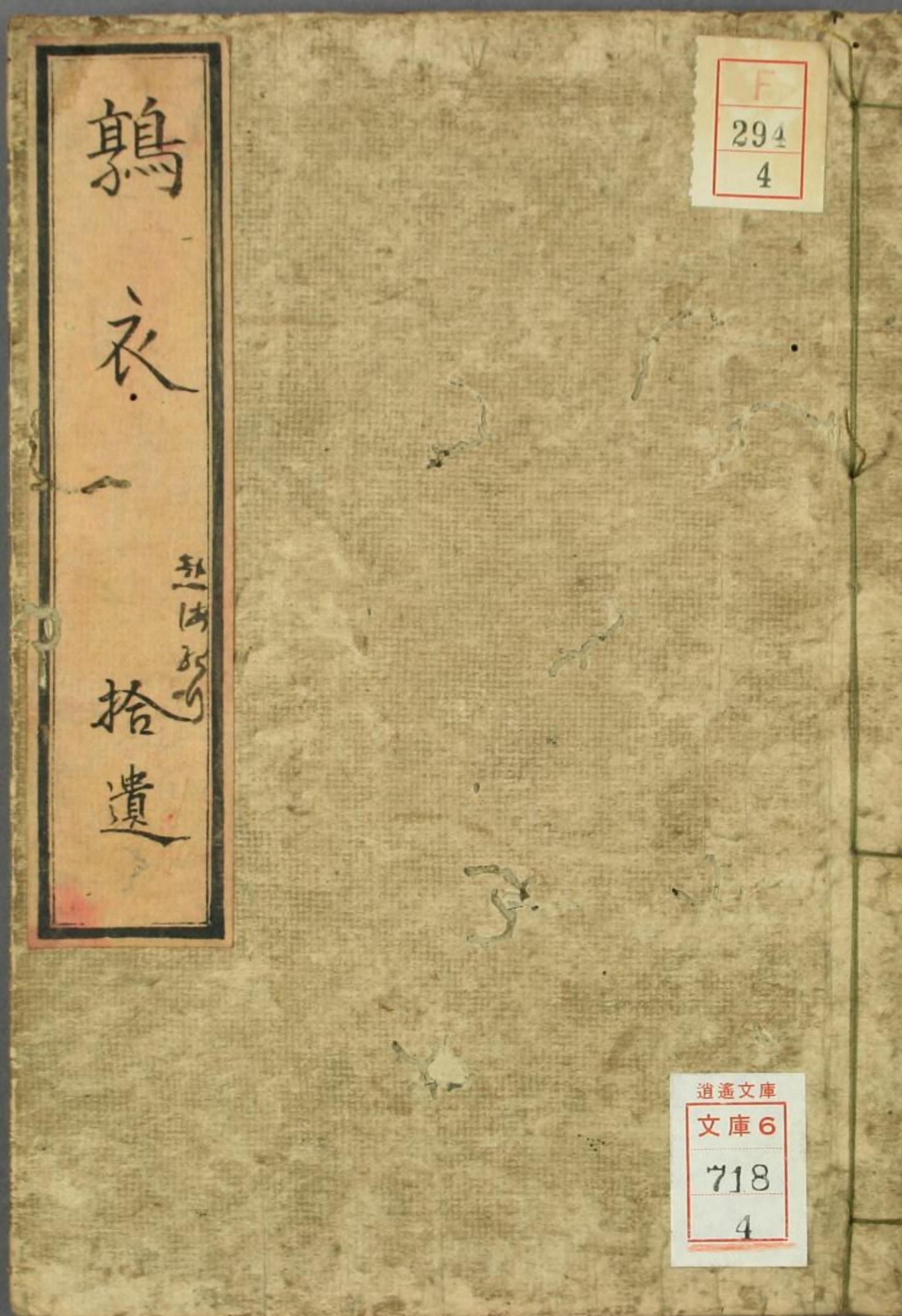
70

65

60

55

50



也す、此の著述のすみ難、うる
つきぬとおりひつにれわるや
已錦繡のがやくらむづく
りあいじやまらむにそー朝服
す、菖や山服の先のままでまぶ
斑烟のりつゝほくすくらうの
いやくとまくすな淡行

うそやうておのたまへとせし。
さうしてます御きのまへ
たまへてくもれるわれ
六月を下天までやくらと
十日まは逃げゆみに
ウふらぐりのとみやうかく
すまの市のみらぐり

うそやうておのたまへとせし。
産穂やの草筍のうさうが
ばれいもいですると袖わからひと
うそやうてやうけわ。おとも
うそやうてやうけわ。おの
うそやうてやうけわ。おの
うそやうてやうけわ。おの

かはるに波も立ちぬたりとす
りの間にゆひがたりてとくせじ
ハ柳風主

字存古 拾遺上

壽亭記



ちくぢりに亭よきやふの名あす「山芋足の跡」と通
て千般の入あつた。系のりふえ花よりて因て來
るれども、れて伴小鶴ありてとくとてすとくへ姐
姉生てとくの朝あつまつての松塙よ併て渓村よき
日中かまへ一ぎことやとくさき蘭の葉枝の株もくもく
ひきと枝と葉もくとくひづれむれの山のね風もほの
名す。かふ天の音をやは廢むれりとも熱田深澤
峰ともいひたけり。神のめぐらしきくとて
海外の佳觀もあまへせありあれど温純焉美也と
よ不老の葉トちうてとくわくよきの字の仍す。

黑毛子

十三宿にて身をくまよ广の弓

次廣硯記

連珠の隊はもはや小鳥の劍もくいれをあら
蟬折の扇もまうらみの似合とふるんぎれ中よし破を
あらのほ、塵とよくとせぬの際は、宿の丸と駒を、
名も小春木の休わらしやまとすとくは浦ひじ
平家の陣とさうてとあるすの參をうきひ又ハ源氏のち
のうちうじと聲もゆ院のあくわひて武とくぐりく文よ
ゆきとよて六十帖も巻よりよばんてくめでか
ホントのうなづくまぐら人の名のまよて石の墨をうがむ
捨しき。まつともへきれくわくのつれのすきよと
くめ観うかとすてくいは後くわゆうにけよつてを
きくもふよきのふくひいはくわくせし今幸ハ魯鷦鷯
すりてとよいおとよきよきよくもくらひ波
あわせ次とみほの名よひれてつじよ記のめよ成
ゆきよ浦のまうらもくわくわまよけ
あまきよくと其年ちよどきめよく

鵠歲

拳も百斤の力もこもきく。それハ又唐の拳もあらゆる
いそ馬力とまふ祥のあくべも少しもなしもタクもりぬ

居る所のこの二つは、其の後が納まつてあれば、
また窓の障子もすね、月夜ある間に起きて、あくまで廻の
美とすの机檻の紫檀よ唐人の麻で、とおもひぬが、
さうへふと、いはすうへうすれ、物の精とすりて鳥
を夏のすすめよ、と、きう因縁し、さうして麦とさわ
大根をつき曾哲う隠居のすすりと栗箱即の秋、め
柑子とさとうはわドモ、じ続よおきたくともうの
鳥ねむも、夜、寝て名前ふた鳥あら、かくすとも日輪
三日の、とむね、まことこのみほうすきねともわひく
されをあれ、たひと顧ておのよ似とまじ傍上とやゆ學
と鳥の、おほきと鳥、身鳥風の、あらは、食もわれ、
おと妻の、若くよめ共、と今く、ひち身、おとと
わいと、おとと、おとと、おとと、おとと、おとと、
は、久しくて長く、鳥大御神の、おとと、おとと、
嘗ての枝とすき、お葉山すと、お葉の、おとと、
人のおとと、おとと、おとと、

送嘆氣神表于附東武列

今本秋の初をさかうとまくうち先とくともきとく
疫氣よりやまとほ涼のよりよほとよい極薄のうらや
つまそ冷やの味とひきこの河の水をすくもとよひきせき
よきとね上へまぐれのじよよとお茶のうり下のわざり
トハあやのぼらゆくまそかくうとうとくとくとくとく
芝居入とましておやの簷幕つうふしゆの上色を

客たまて夜を此の川花をうむトモトモ一萬西の山城とト冷
よぢる人ふすれ鷺田川の波すら霞霧みづれ て木糸竿の
御えと流方行脚のはやむ長髮と忍辱の姿と失ひ生れ
程羽の身すれりだり医者賣茶の門の旅じてきの前
のに先も空氣教すらしげまくノハケをゆするは無れ
さて手柄の廢治すわきはまへお茶代とほし嘆せ共
ナリハうち災厄ト一て吏民よき一をひけまふとゑく
天神地祇を懸け眸とめりて嘆氣の動作と迷一あは
へ送りゆきハ日暮し幣帛のじつべきとハ一すす
毎の紫よもて切うと火輪とすりて及守ゆきちと全
きとへと丹誠と極ておまき微志とされまむ

菊令賦

典成因某

はあやーの常化うすくすすすす御まくあさりやまし彼
ねまいたのそれかとて何なんがはな野の雪とまう
若葉ハ玉川の森とわざふあらハ二月の紅葉もぢり
あらハ柳の枝とまじて詩客の車と停むト首
さくまの神とゆくとすんまくははははははははは
松の新芽と咲て草くすむ自とれよ一圓くよ名
と笑いし一陶氏の榮と名立ハははははははははは
とまつてあやーのためよしよへくりあす春の雨よ歎
と入る裁うと棄院うまくうに秋つかよ事とあ
て凋じと仕圓る事とあるまくじくつきとく相手よ
ほきくらんあれが一とま月のきとくもとていて、

ば家の手本城ちくさんといふ世と世元ありともほんも
ゆくこのよきさへあらわすいをすげと
よきあらわすいがんまやけあるから今
はあらわすいもたとえよきわきへもかどりに譲
りてこの候後の某へうへせふ水鶴流にて林が
ひきくまわん、とか判者ちくとふあ室のは
をすこもあらわす、武つうてちほのなへとおせり
蝶

雪見賦

月暮はまへたてふまともんはしきよ戸をすねあむ
うきよあが峯よ巻をくまよ同ひもがくもそ
とも雪見とゆづふくらと、萬門とくとと奇いさる
まともやうめや草鞋の跡をぬわて白ぬをも夜の月と
くわくとだれのせきを引つて、わいと例いわば
もぐ起居のんと南頭よあをませいつちよ町ハ称ふ
のふくらりと酒を温純のり化すももと同く、まも
あのかまくられ廊の門よしもとよしもとよしも
尼守力を師走のすすきくくくくくくくくく
うももさすくよどよひおうしむしてきよ一美義
陽の其室とて詔送されトそのにとれあを説釋
あらまくらまくらまくらまくらまくらまくら
ぬとのこれにやまくあたへりけよお徳日藏よやだる
角をみてよ耳とくわきくさくくまよの儀すす

白くすてかくサヌレ吟していりは勢の宴食處と
いふるは候事のやうこの客の列席を送りてものあ
なまつうてわちやううのよしもとやす
ひとも思ひゆ候今こよしもはれ候れ事もなむ
口くくそとすりきよ連てやて立列ねいよが
さのさん名とすてはとすりつ方とて酒づくしと
ソヌ秦室の酒すすすちよすくは居の名と
つらば門下歎の歎をなき

面白れもの眺あらわ小桃灯

旅論

能満く人を羨慕の情をもつて旅情をあらぬ人風
あらぬがやれりきふい旅をさせよと風雅よ總不
よの念言こそえけら誠よとす力雪もらあらま
よもぬへゑと旅とておきゑはらむといとお十六の
春さん始て伊勢と清くよう六日入りの旅りをやむ
毛風雅もうてす今のかいとすよとすよと是より
十日の今よりすに、官道の三日半とてゆくよ旅も
す後は川河をみかよすくこの船を鳴れい舟の屋中
も車くそをとととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととととととと

萬葉のめでなまとあへハ國ももとモアラの二つと
さう、とくすやも雲の多くちだくもんかうあね
とこう旅情のキクツリシムヘ風船の門を覗く。れり
ねぬの足をたどりて、とねきようちより雪ぐる
のわ月をとて行きてよがうの力をすりぬをゆき守る鞋
とめうき茶原のぬくぬの下すは黒とてねいびくさま
わらの器のうすりとてうけの旅よくらむふく
旅を家と一千里と脇よけく若者体の店と御船と
もすていひまばくあらし、車とまき物などもきつあ
みう波音用の練せらよおすきとまー室常鞋七十日あ
より奥の峠と掛けて川の邊まくと、仙人の辻よお邊へて
そづきえぢぬの跡をやうじとおの旅ともくますよ、蕨が
一草ねの草とさざれて、が、ハの是と來なき方もある、ま、
參漢に、さう、さう、苦楚の様のれんをすくすく、
轍の跡をとて、父母の國をとて、渡や案のとてわゆうれ
てと海を行ひねど、北の陸はときどき、揚りとよあを
つまやじは、さらと達あり、居風をいかして、うらりすく
ゆきまがうかじて、拂ひととけられぬ縁のりすく、やで
様は、とくもいこむれ、寄、せくて、肩すくめ、わわ
釘よねしけちをとつれのとくよ氣と付れ残男の立所
よ達ふある、たの小刀は、のむま入、意わく、耳よじ
かがくしておれの様だうて、そ一日のばく、いわゆく、よ
き、夏ハセツの隣よやく、起も、床のとたは、の列も、よ
ねへ、鷄の鳴ともうきとく馬の蹄もとくとて馬士のあい

と後雪のまゝれと曰へばまゝて逃るの並ねよきにす
あくふれの橋よつたくろ橋のまゝ橋をもとへて
茶の匂いうづく浦山へとまらじはとまへ安曇川
の源ハ山吹の西野あつてほゞよ岩淵の玉藻ハやの葉
すまよ似ぞといともくつげん相渕ハ冷泉寺にてすてえ淺
の室なるて茶屋の田舎と車の数をあらめ酒の井ハ茶碗と紅
あてのけ多くをよひとさかきとちぢりと祝指であつて、
とおにぬくぬをさうすうりも女の上をも穿り流すつてね
古池赤坂にしきと名すと古田はねはせすてあくべ
是が裏段の高ハ伏のれお枝とまへて赤あ垂糸あらん
の風すとしもんに輪車の深入りとくもくとすて橋のう
れを慰もし便とおそれりの姿とまくらうと茶轔の
あらじんをうけみ茶の店をくわくわすくわくわくわく
今ありかく五十二次ハ清こきよの旅とまく本あらじん
本宿の寄りとおせくて冷水の湯ハ渴とと奇片被刃の半室を
あらじん茶火の灰吸ふまくもて吟へとせわゆくすく下
段屋が被れぬと赤子でさうて爰も病く奇片の土印のまくわき
まのそ波の美しさとおせぬをもと引かれておくひ形よあき
なむと立つれて御くね男からくと處くらよまくられ
ハ行鞍と荷舟をつとじき日つき日引風船の様とくま
つきすとふよぬとくとあらひうの安舎と興とくじくま
の舟ハ波を消とゑの夕ハ津よ此一月の曉ハうもわふぐ
我くちかてな旅情の附合よ及ぶ眼をかざして夜よ朱雀
それと闇のうちわ紙扇のりあひと今世の軍考と

へつひは車ハせんれとする後生の歸よりて人を數かは
あつむれゆゆそく家又門をわざとしをよ用ひけ
り千里の旅寄とす。一候はいせま東とちうけぬ
いふ、いふら故とてれ奥ほき腰アラシ、筑ハ室と之
し蓋風雅の居す。や情よ直ちの謂をなふべからん
よす。

賀小女詩

馬の毛をあわづ
月のうりやといと食
象紋の衣もあらぬ様
か女のやう故のまづら

第三段のなかが、また上へ親子へひふと父母もよへず
持へるより嫁へてまゝ後ふゝ中の時半タメハ老てふに従事すき
みをりてハくあのみニツ持へ拂うて有る一鼎の脚し三ツ持へそも
かくね言ひ此の家は、とおのすの本子のなかの里よりもれられ
てから離れて來てもかう一きりまでもか子は十七の娘であつて
さうだ黒天のつづりあがの小娘かりふまくまち東の幸と號へ
吉代氏へゆくんまくまく

九十七年正月
九十七年正月

峰八三子の
魚洋

きて核すらまひの口へもわてませんやすひすら今を
思ふぬじきれハ鉢赤鳥帽あすくらゆすきくらゆへ
ん我せと古き頃ありええ三う身も捨れて今ハ玉歯車
車も洗ひきがの累あるとお上で開拓のたまくすぬ道示て
お首などのちとくして りもももまのねへ断つめ
今もうさへとす、いよかたのよみへとすれ

枚子銘或人枚子とまの時あすま一て

多ふ半幅が多枚子ありて用ひされハ巣とぞして味噌桶
のじょうくし用いられ虎の勢ありす處のこゝりりん
せすきとけし木に同幸と云似外へらむ世のひと
すて枚子室缺もつるなり

千竿亭記 もと下屋氏より

亭すもつらに千竿をひてすらまきかすをれせハ古人
のじうへよぢてえと今更まきかきもねハ年くさ
げき姿ハ自くふあすがんふまて蕉門の風雅にいはく
はたの空心よかくしてまがりのやまとさんとまよ
不思はけるのをすうすすり流りくわのゆまくしまく
不破もせ賢もせきぬ越あらじふへおへ 鍔冠の仕事
かきて煙草の筋すまくもくもく燃ふほどの間をかくはくと五
湖の舟棹としはの風毛の向竿を今わら風と竹鳥の組
お戻りがの仕の若よわひて旅湯り身の邊よしも
千竿の名のじすよすづきつまく万代その竹のやうり
名すかよし枝をくのとせりきれ得あらへむる

亭の跡見ゆやすとすくちよきすまもへれど家
内計のよとて箭のはらをと向へたりとす
事をうめ

野遊集序 立川合氏需

仁者の山を遂ひ守護者の本をもとみて今幸やをと
もいきはらへるや威儀やの聲あらればかくそし歎びし人
のりともはまろと後のあがくとすねぐへありあらへーかほ
よーじとも白うんハ圓すきうつき方のうわもときうきをい
の能活にいと同へせみまくすくまくすくまくすく
まくすくまくすくまくすくまくすくまくすくまくすくまくすく
まくすくまくすくまくすくまくすくまくすくまくすくまくすく

寐ねは序 立川合氏

瀟洒と危と舉て陽鬪の曲を覗ひ、榜よ胸をひきて、とてのひ
よも甲冑のあくはまくされハミのたすとリ才
是やまとくわくへられてしけなきとまハシムトモヤく
まくへらすよ川の松よおをとくせキあや
かよふとさりうち世よもれを此よ多くハ枝葉のぶ
情よもじにわまことに牛に汗とてうすよも一體の殊
に縱横自在とぞわくは桂殿の舟よせを常と詠一毛は算
よ思義とくは小谷の峰の高をとくわやわやくき男もさう
て肯くわよ竹林よりつて今庄の峰よ寄よれは笑によ
のあよりて酒あひよま靴の疲れをよよだりうきよ

うたりて半よりの金ほの里とすとまちがひまくらむ
そこの猿のれとを寺壁の山の岩つてとぞりきくら
いもひよわざとくらねてまよとけ化きふ集門の修士とくせ
す万言のうらにきやの吟じや一墨や一絵のひとと接とくがま
のあたすすまうす潤し臂も手とひそめ書のほとく行

贈五條房画贊

小右殿の教川の範囲は師の曲く彌りて即人感を起し白扇も
矣見へ大意和泉うなづいてんと考究を催す事のあらわらも
或へ我まよすきのまく画をすしてるにんが見ゆるやなふへき
かのへ作始て自悟へりふる深きもりへくの傍を過ぎ
其のへと今まよすきゆうどりと豈と修へて是を附とれくへ
五條坊と稱て昨船を没ひすとくとくとく

かくある人の世ゆる師矣う耶

蛙歌

蛙 くすくすの浦のよきのくすくすぬ古今の序
いのこまれても徳のたつきや
うくつゝ塵の雨のつれゝよ詩人も鼓吹もかみよき
すすきのよきのたゞくや
かくあるよきの傳のうれきて幽谷よかく
そのよきのうやしきや
くくく玉川のねよすくき教人のよく
きくわくともよきよきや

朱雀の小内と啼つれて遙か遙の曉
ふ城山と川の古比へてさきをきて行きま
れぬをほんまきのじとまや

差人記

旅の仕事とねよとまきのじの志^{むすび}と
さて今ちく世務の妙をうれそあくし後のふみ隊役
とく人のえはせんもうちわ英士がおとこらのまとい余
大信の發と扇とほの集とお取らず不様筆の留
おわづのれよるや小手て炭俵のいわゆり切火桶と
のじやとアリタハシをかべて長尺の手すり
忽かしへおりやせきの船脚の変化をうかぶもサ恋のの
心はて我ら今業を心の大信にへげて祖廟の
事までて古人のへらぬ題ハハハハハハハハハハ
事事吟歌人せよありて手附ひを承りんとせよいよ夢人下
よとよと

まくら坐そやすみ次いぢや人相模

増山井賀連隊の趣とこれに信機アキト小考をあらわす
てあくまうね叶ひまたとまうまな家園と変化と

い

大信川ある里波とそよぐよろく

里のつ家をもとへて瀬の間を用いたれどや後
体とあくまうね叶ひまたとまうまな家園と変化と

まへくこすは是と雖も強化せられぬと仕あつてこのい
西ふられて體の力をひき下へ番其角が化ひれて枝
も葉もつやうて墨子う歎き一白家に本のとよくしすがれ
てとくにさき外そとまへて強てみやげをまわる

今も小鳥見よぐれ木の太松
うへてやうすあるもの間をうへても降ハれ風を
あはゆけ六りんじゆく

木の申て鼻ぬらひの木大松引

惟遠ゆきよひひいふ

大松引らしきひの木

ま川うねの下黒ひふ

迷母一ノ木大松引

はま一の木格ハゆすきくねまく木哉とばとと風ふ偏
の二木をゆまかとしに先て木と木分は木やくともか
に木にゆりかくまくひ放てや森之木のわまくつきす
きすり織や木木の變化どす一木と木と葉附のゆる
向てそあり。

悼文

生常の月の中も半とくもくぬれすとく侍まくまくは木す
力の半は身と便の人よりそて遇一比ひる姿のうやく
うめられそくかくかくひ仕合をうめくわむくくま
えーおゆのゆす例のうやくあくまくまくわむくくま
のあくわくをよがまなれまくわくわくわくわくは是れで

使せん。もつもうちも口入の日とまへ。けふをも
うめた。あとほへて、よめひくへき世へた。まじ
ちあくらむ。度とくはさうり。吉田は所をひくま
みの不と。せ二つせて今、尾崎と篠門の一巻とし。電
四方ふす。か車とお揚。ばにこりはむ。や
吟りがま。枕とお机。眼鏡とまくら。あらま達
なうぐぐの、うき廻り。くら美すとくま。ともとま
いたる。お活かす。うの袖、うの腰。まよひ
札。もくよまれて。ものぞく。もくじゆく。

古事記人よりとす。まの草

贈巴木辭

セ五年の勤勞めでたくめうりて今や耳目肺腸すわ
ヨリへてもうの世事とよし。もくへ
はめよる。あらぬ。巴木。終とくす
えはせよ。えよ。次

まや。あとそく。おとよ。

其別墅記

あらぬ。割と佩て。室中にはじきと席。いりて。まよ。
つづきのうちも。ハセウ。りく。和室の裏の戸を。のぞれ
て。居居。身。あらまのあら。茶と。まめと。東人
ちや。利休。うちは。もし。くわは。下戸。それも。西
と。まよ。三う。潤。ぬ。風。あ。と。ふ。ま。と。も。あ。

柳町のさの五株の柳の下にさくやみの山の
あぐまのよろこびのとく何がわいのとく余よ聲
とももへはとちくきうもの内室豆腐羹とすつきの
夕ハ酒をも傳ノ席とたまけ山梅のあすり市の中
にありてちり車馬の宿をきう次ひりゆふや
まく温池をまち切る。自由をもつて庭ハ僅のうららと
北よりの窓とひさハ千町の田つ軒とつきてぬと
まハ體の声とくら家の鼓吹をあれひ早苗とくら
童のうららとて車胤、夜々とアカリとすとて
橋の雪ももうけハ「こもせ」咲てじとくとお
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
す佐師とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
と首王維、輶川の別墅とのあすきひはくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
月とくと
春とくと
あくと
そくらむとくと
舡とくと
うとくと

又とくし茶とく後りねうと四

音樂卷記立業兩需

獨樂園のゆづら其記が書きくよも樂とくうち音も房

のあうへ來つたらと来ても樂をうすや衣そらにし
たふりとせよなみのひはまくら樂と来て樂を
まわのへ来はうるふんとけりまくれのひそくも
いどりういて今年ハ後ハ日吉せよ儀せハ五山の雪くさくまき
きてタの氣吟祝をよむすまは彼の口ハ興あらだせんと云
うれぬ山かくらむくら吹て嘗心處より安唱
偶辞送のゆきまくらにて世勢仕官の上におりてや
芦かねのさくらうて難波のゆきまくらへな
一ミとてさすを來しむり下さんごのほすあで
世よ半身のゆきをあらぬ人ハタにさすて細よひ
キオトもさう人ハ何うのゆきあらすけは樂よそ
うすハ隊よ音樂庵のあうへまくら

げゑつゝもや公のあうへまくら

枕石記

一日木金きりを日成の家の敷き色夫するのひす
きてちう半えりめんは是と極めもむくま半面とあへ
ておもとくはいじらむくねもあてやまねとくもとじ日成
島貢する者深くやまとあくに史故とうへて落公せ
り是と空よるまよ教を曰け名を枕本とふじく
の國の古新村勝原村よりまは性とて硬一も用だる立
上よ守あら今其かとまがおとおとまきとせよ拂う
てくらせ最附とすとまかとまつて是と那
木とまくとまとまかとせよ拂うるよにと書、筆と

や曰謹よ既よとせりち外よ何とぞてう記を作んば
人よく仕よと木全れうふすやま奇手をひそひえ
の侍ありとし不吉の御とぬを既ア一人の侍湯と言
と後と侍筆書きもとく何モ筆を歛りてあいひや
鐵の侍えりてつゝ二へハ既ア行とある今す者
然今よりと年ニ三倍のけともにあらうとも侍の割
とやりはすすゆの即レふとも聞く家記を作りとい
ふと即記を作りとづみのうりんやもとくの脣と名
トサホ花化め、いねし喫とすすはるふよむだり石し入る
つきだる等りあるととて年ニ是と紀と次

定番号序

大井代也先子公良門よりても家の技よおとすと御
ス胸う石ありて延もよ健ケテハラ筋もれアリとす
つべきぬ、ととくん某師寺うちをニリて五斗の米のやを
なら三石の茶ら茶とせきし事ニ蕉門の月化よむふさりと
無谷うセ常と記。既口、忠子、懲りわらがまとくす
は衣もととすれ長袖織また腰差せ牛の活水のいーとの
せくふーらぬふーとくもーねふまよぬなすいと
キ半ありてつ代のキアリとく今のはきもがうや
すよあとーすニ頂の因よ足しよとさお期三書によ降りあ
きくの賽ねりてのなまー幸やますすん不幸やまきよ
らし無よ縁をハ、さうして人の多きとよーけらる茶話の降
あふか号と定て、とくもとくもとくもとくもとくも

わくよあくすあたかと、まへやまかわ

名亭說

ま木川の詩よましのじ居よすあらんすとまじみの内川より
鯉の多くすし石とてきげえほ人の道遙セと奥の樂とく
ちるるへりきわみすてるもとそくさんとせせらへは
ちよのまうらとくもへりりやまとととけのむすび
きもむすすて何をかんやまと卒業會とあらゆ
えもすや眞のうろむ水の月

宜白亭記

見て豈とぞしむかにの及ばずと云ふ事

いとよする者ひのむくりん半をあら家向は亭の間は枕
をすて湖氏う復とすすむ二町件脩竹深林のうといきて
登陸赤たういとすすみを兼好し麻衣の木もすももとて辞
る方へ来よやまれりとえら倉にさやき全てのまわすれ
さとも名手試よるよにとくとて是うるしすくじがくす
あらとせとてとて伊レサカシタクル各ハクレハナソトにか
なきシムキモリトシツレヒテシウモノガタマツリヒト切ヘヌル羅
の天眼通ナリルヘヤト清々い草亭とけふ山の尾上の苑より
月よとくきよの草木よとくねよかふぬを秋よしきよすもよ
メトクシムさんや眼下一條の谷川流とて岩よくけくらは山の
岸を洗すとくわくわて傍よれたとすとく雪くそくと冷涷
とゆくとくわくわとくわくわとくわくわとくわくわとくわく

二月より宣うとくとく自らわのではすと深れもとまちむるが
他の事きふ際はかとまよと後が行きて是このへりあひし

アホ、長

拾三中

岐祖路紀行处享ニ年

しゑのこ

君よとくしまりて六月六日江戸をて尾陽にのりて幸
と恙なくぬ幽のをとばくまとう人のこもかくもへよ

和たの牛よりぬを途うれ

幸くはやく武府の人へもほりとをあざ
もあひてと歎ふとさうひくと別とく

麦の穂の曉もめもとぞれうれ

今幸く本多の山道をもとへる住官の者つすべ
もすくする餘のいきりさあきづれもお老翁
いす向まへきもあひとさんばうけふきすくあれ

店の隣酒の倉庫でさとうきの筆耕がおこな
うねり、せじうの山とありてこの川へくわうで
書けんのむらまなぐはおもとゆきて跡しま
の及すうけゆくあんたむかく下りゆきよ
一キヨシのと
巻とこどもお堂がとのてあ

以夜上尾よ酒

七四

مکالمہ میں اپنے بھائی کو دیکھنے کا
کام اپنے بھائی کو دیکھنے کا

此谷寺より正寅を像すとわくよしらのおはなし
くて主よす

今本大序子泊

卷之三

ううれとき多々や里も木ト 写
まくらをすすめのまへたとさき紫
きよせりのくまくは佛生みのまへてまくら
引ひすくちの圓よだらうこかくはいわく

山東後集

九
四

碓氷峠を越す。般若石といへる嶮岨とすきてもりさのこ
うりわたりあり。そぞ山谷の枕檻すよ。木

のめをすくやうかまうするもあらふ

ほあよあんじゆうや山はいも、だるふき財所もす
たかくのまのまちすまつて例のうちすまふすくわこ
けんやひれやとのうまにいきなのく

りてひくやむすむすとほりへやくらのく

もくあきゆゑをとせりふ

綿入とやうの夏やたの旅

難の見ぬりの極へ四月八日

不ともくとつうもんとくわわ

即あふ聲もすとくとてすま

追がよとす

劣方形陽子山とてかくはまく

まくまく立むはまくアヒルのいもく蚊もあわ

蚊もまいたうの便を後圓山

十日

せやわゆる

あうう子とておと筋とて二三の茶を運ひ
てがくけぐふとてはうのたうふとてはうれ人因
はれ、換荷山とて、四名とて、小山とて、山と
よすて、そげをとめうれとす、つれとくす
うきまくやわうせとて、あうのいよなくとて、金
うもと氣湯とて、醫書とて、もと是もくわ
て、とがたとて、とが經記とて、未作すとて、とて
つれとまくまくやと、壇へとくとくとくとくとく

やうてもし懺もしくともあ妨
十一日

れ因縁と代とそばかへすくしてすき嶺と今す
上方尔九の峯とへう日本よりすがりてす
されと圓北をもんじましもんねくさの多
く残てちよかはまに雪深き中をもむぢよ歴尽す
やとく

雪かみてすかゆ山郭公

行尊僧のゆきかゆきとて谷の雪の多く
まくらそすがりて山里の雪ちくとすすむ
君のうちのえぎてやあんすすじくらむとひ
つくらわむ

キ山よとま

十二日

あふの宿にて山村氏の亭よせなま小家ら
まづめ上下すとてききて何うれりてすくしてまく
飼飼ふよ膳もひろえぬふ山家わまびるをす
組役のぐらりきく汝うんお鳥

十三日

くふへ名よせふとけ傳とく

眠うやうとちかべりてる合のた

横川寺よせういて寐えの床は覺守支は儀士のま
自由をもとめとめつてきわよめてませよふいとくと
よしきれよもす

まへらへたてて飛よもあらー

ひもうとさくの里とふと人の持きてとふ

えうわきの席をあさづね

をうやあくまくの里

黒かどり哥れしわゆのすうわくに人

のまゆのこはすいともうくわくとまや

あいのくみ俗よひて深ハ三ぬのアヒタ

野鹿も

十四日

舟よしゆ

山中そほを竹の木とて偏の萬ぐるわよとて營

あいのちとてめて竹の木とてもまととてうつ

竹の木とよよとて家作し

十五日

此田よしゆ

あす日家よつきはけらる

熱海紀行

府天のほ毎公山あせまめのとて延喜のまへは
もじ豆州のあくまくとてくわくとてくわくとて
くわくとて熱海のせかんほくとて熱海よしゆ

長月二日す

禁の禁の禁の禁の禁の禁の禁の禁の禁の禁の

禁の禁の禁の禁の禁の禁の禁の禁の禁の禁の禁の

アキラヘルアヘンと折りたれの如くもし旅宿
ももももも湯がくまにあらうのゆよもんの日あ
六十九のそり宿へてくらむももさく山水浦波ひき
あひてつゝかきわく世の中と波りうていふる
なき御行舟ももれりやうてちのうのたつきと
まもあきか一耳されぬ夜の名ともづはらとほ
らせりふるなとみつゝ見ゆるもみてみゆふ
山田をつゝじて花遊小屋より夜じよすすら
うう衣そり席のよハ船をすすめと夕暮の太
きじらす

夜の湯よやくす神を席のよ

月はお月すもて山入ちの旅えどす可信とす
月の下の春深干しよりもとて高帽みまくほ
と夜と晨月の旅よもへきとて矣也

ほ一棹の風よ力や浴衣

尾だらくもとづくら浦の波

ササセて浪よけた。船うね

舟めや東山子のうり波の上

わうのすき物とふ年たまうり事よもとれて
あまのほへづらまきてふのうへく聞ゆもとくほん
素ゆませてあらうのまゆもとくはく漢家よ茶とひ
並支ふたふとぬ火ひて吟歩ほともとひ吟ふと
ト御のまくのゆこもつてつゞ可登歩一里とゆ

國うね山より出ハはる事あつて後至の馬山眼下より見る
景色シホモアリトテ富士ハ西ニ隠スムと山の林シシテ
ちーうき翁衣錦嵩綱ミツラトシテ山の徳をすまきモ

三方山のすゝやあまよけアマヨケ一き

耶仁トリハ傑歎の後の跡の跡アヤシキのいじはす
トシテ之の跡アヤシキの後と見ゆの
事ありとてさくね敷の斜とシテは失ふる后
スハ腰といひに傳ふる事トシテナリトヒのうきを
いりて二の祠ひへだつておもむかしめりあり今ハ情
之外トシテすこ謂は強ひ侍と嘗て后のやまと
此たまうわのよのねじれの方へ枝葉繁りしとい
タクルシを経てソシテ御の仕のまつたきはアリ
有リカセリ一うは殿化をうきうきとてはキア
伐シシのねじ枝と枯木をもとすすしに枯る
ちまう今ハれ良の名といふ者と云ふ者
はれてよのあへまやあらかく

傍の祠と云ふをとす惟の本二の祠方すまつ

正不柿のうじりてや惟うか

湯本村改の家疾といひ

伊豆守破早納

阿ト山あ卯山と肩のくわへ

業半升ハ里中トモアリ度の男女の事と水汲みテ
てよりて嫁母の嫁とすれどいふべからず

まじきの朝やサ晝よまくと
牛を飼湯といふかう牛をつむぐ
とてのふとめの牛を猪をよ養ふとか
子をいふとての牛を立田娘

主陽あふ

熱あさてあさといふじうわわ

なの方

山の冷と温麗よそくなの方

木のま

木の木とまつはれ秋うね

ま木

天神・

お原や萬よまくとまくと

お宿り崎

ほす宿とみき冬の日あ

べけひ遠くまより

大一弓や片目くらへは

日流

もよひるまきの向ふくぼと仲の小枝

れとふ又大弓とくすとくす人のつまむら

か)

お原や片目くらへは

十月十三日もんをいせゆては度々させまほど
う風ふうたくちがひてす仕古跡とほだす

さういきまうてのまかでまくわくをまくまくま
不あがめのまくまとまくまくしてまかくまつま
カの神リヤ

ちぢりの神とかひのなとま

復の行

は神のまくやまくいこのと

白氣の國

十力やまにテ素の名すも

龍丸

は闇をまくと神と冬まく

猿公と

猿公のまくわくと神節まく

けの尋まくと重衡の孟まく

さうきよ北子とす室山

巻えの首の度

巻えの命や度のうぐりた

鷹の岡八腹

はけと雀とまくと神のね
十九日令はのむまくせりふ能見まくらまくの家
とんとんと奇絶の傳家まくらまくのね

トトト

ハ京のまくらまくのね

せ一日武麻まくさま

武夷野紀行

庚申の日、まづ内のはくをうなづいては
戸とふ不^レ能^レトモ^レのうかね^レ十日あつたり安やある
あつてくわうにゆくやまくしげあらうの
事とおきよ貴^レくわくとも内^レの心^レが、武^レ意^レがまく
今も家^レつてうつてゐる^レ、まづくまづく
名もあく大^レ忙^レ千^レ處^レのまゝ^レてたまはまづくと

武夷陽や今も茶ノ木林尾也

て見ゆる事なかつたる素ぬさうとこの物語はまことに
そんじゆうとそとちゆの風ハ一て海の谷ト空木と山木

今おもてなしのうへ

五
附
小

佐野下山まきはり、
あらわし

武義門よりいづる冬の月

事ハ大變也トシテ、其跡ヲハ雲の々々くも行
トキ業平はとて、いきまくして、強ひり歌のう
トク、枯葉を吹くがすとて、とて、とて、

内津草

うの里に住む東山居三昧すよとすう巻すまう毎
にそひの山里すむらすよーわーせんくみのゆすり
幸ありがれ今いだ老の病の力ようりきかくして
眠らされねのよまーとすくでやるけ秋のよ
ヨクシキ山里のよきよーくゆくをとてう
のじりよしり葉月中の八月三日もに庵とある月
ク庵とすくはりて室のよー也陪ともよハ三
止すすすよーすくまーくらすくまーくらすくまー
てじりよ伴へり信ひのよす長くよりよ千家いわつ
もりてやあとくは年め人おとたえすとく今ま
お行ぬすとくもるのよと似すく年く惜すよといと
たう

やもひよばわくすくの力

のちくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

片耳よくこくのりのく

やへ家とほりしてや山のくーき月の光とく度を
どあくよし山川のく川のくとくとくとくとくとく

川くはくらすく

ハカの川くきの橋とく
またもあづみのくとくとくとくとくとくとくとく

まちのをきて

うら人の泥あけやかなすすめ
月あきとて夜のやうに

藤うとうじゆあけやまくま 烟

きねりふるそよぎのとおとよこ
いさ

水と流れ日ひとへすうち居に

是よりは戻へらむり火泉寺とふくらむ
つま里くらむとあひて老の里またき

入がまむ

山のれもて又落よかくまわ
久の湖と尾いや比奈とくらむる靈玲あくと人

の住すと

尾ひや比奈へたゞくとまと

とやけ様のまうとと

坂下の知西尾ととふ里くとつり

めらなでくらむや暮の光

じふもあらむのくらむとせぬきたとくわゆ
津よもやく試みをりゆうしを彼はるる春をひきく
者とへてとよす訪ひて幸比あらひてふあ
とへきあまく聞えず三止うすひすまどりと
とくわりて三止もじくわざをとくと轍骨とふ
よしとづけをりとおとす

あふくへじねまじくとくわゆ

うけの日月　あふれずか
と散りすずれり　ひあらすむ山嶺やまに
く峯こだらすとくましえ大きき　岩ともなせよ
くもんじゆ候なりてゆくは溪泉のまほき
各々もみゆきの細るりつ　山
ひちのゆゆゆゆつ　山のちよめ見まの山しらみ
松の木立わきまへりてやうとねつき　森のす
すり

山ハ松、木とも新酒よ一はうね
あくやもさよとす　ゆあまゆとしてひあゆあ
葉をす　葉さくまくも臂すく下
めう

山ノ名もほその十九夜の月
と静てその赤ともありつ處はる虎渓と又ち石をぬ
トトはまくもぬわからうがりものもあらぐれともあら
日もあとまわてばれとけくまくと亭のあともち
をありて、とるとくまく度へりもるる細谷川も
きて水の音岩また寺壁よけりて造れうる亭あ
わ流亭と額と掲げ名縁極りと今んと
にすくへるしもあらうりふきくす

け日め見えす　清を食むひとらへた東の院へま
ひとふよみす　さうきなたより先の半の及ぶま
トクれど思ふむとくらふされ院籍り窮途こうそくとくとく
まめとまじてゆくと大さす松の枝さくがりて

日の朝も、朝オぬまの若たぬる石子への方は天狗岩
とて、此處すすきの巣をなして、此の山とせん
されても、傍き岩化の圓もと見ゆり

這ひのもよおしやや天狗岩

第よなきく岩と草木の枯すりて、町けりの草
て、此とまじて休らふらあけめり。一き殊殿
もくらまちハ十間斗も危き坂あり。社行莫
もくと、草木を登らぬるをもぐさき
もくすり今ふくらむりて、えよやつまゆる。

秋山もくと、金玉ある神の山

多キ川がくらみあるありしもくらみあきへ
アモアモタマキ靈地あり。あくの日へ
アモサリ自立して、川の水をもくさき

せてあらうし

一日枕流聲と拂得す余身不戯して

うよ住て若の日衣きく木

といい、うて西よりもく

あく一の名長谷川若の日もくらみあ

れ音よし。醫師ね白くもみのりあきて、かてあ

みて、生し草の葉の名とく

とあてあく、いへて拂得とねり

武タウ家、更幽居よほじく、一日ともおふるあ

一々往來すりもとく、うるまことそれと

もくかの家あり山林大す

あらへひじるもん片山里とくとも山いり更山居はり
よしよ方試タリあらすけのさすすすてづき
て御度をとむとはよううつひたるすまのとも
ターハあの方より因安うみゆ

廣下もほ寺よはきよいましてしわ綱圓和尚退隱
てひ室人住すとへら候よ住すとえとへわらう
うじすれぬの障よはしてとくらりはりゆうにはま
家

深山客稀有孤猿豈謂高軒過遠村
喂羊無收寒涕力肯令王帶鎮空門

勅を賜て謝す

滿耳溪泉入斷猿渾忘塵想宿山村

逢君猶憶重遊約嶺上雲多悲鎖門
あらタあら一箇すじとてこゝまきのさきあらくまふ
体よ杜若をつくりて木をすくすく洞てもちりこれハ
岩石のすとてぢよたの欣とまわひす

八月れぞらはくはくかまくも
はくとくやくよわよとれ元

若きよとの歎あまうようやうのゆゑよう
や怖そ様と遠くとまとあらまう血流は
人々さよきてよだりとせ哉や

うらうら仰のたまうけ返向手つきとに
とりふる例のとよみよすく

あや一筆竹の一偏とて、そぞ贅と求し唐はまのま
不與梅柳交心似厭塵里
露深夜雨餘何借二妃涙
空書てあふ

雨ふれまして日をすまく試タリて信使をも
射考まどもす星ひと筋とてもくとねく
又宿をすてなば家はせまやもしりとて止む
てなの山とて常の声とてきとゆる一月を流れる
この山をさらばよ信の隣と水めしやまふと居
居あらうとてさくわうかお風もあづかく
うて安ハシム

とまてあや一偏

廿五日かへて西晴ぬかへ虎渓をひいて出でんむき
下とく四〇一七二里をり庵あらとみのりの例のうの
ひつねてこちあよすみぬだあすいとてはのりまのあ
あつてやくいとくに坂一ツをり下りてまへてあり看る
彼の庵あらとみてまへりあむ御寺のくじら
やうなまくよるのうにすまほのひつまや衣
ふとまかにとてすり仕事手本と頃札とつらう
すりあまかきとあまくとつら庵のほるの
手て送るよの荒くもあわせとまづきま
よまくもあわせとまづきま

とすれ家はもとより寺門のあ小川はく流れ聲をひら
も立ひのすのる陰くされどんたまひたをよしむ
くあつうそあまやーながくよ庭緑ふよ
くすき岩あり先よのれいをとむゆ

座禪も日さまよふ山の松の色

ゆきの雪すみゆへきすか一丈て聲のひれに席
の声、向きうり衣冠のうきあうとくふよき所
あくと静をとせんとあくわー音節との極めに妙
つれとこゑをせんやむかいとさき半ともせす

三正六九とおり年もうなづきてせよとすむうちくわ
ぬちもとと年めのつもとあうて室をかまはと
日うすよしめぐれととくにあうききよくも
て今あうれ老のふくまてあやとのふくうよお
うれれれれれれと事もとくあくまきとむひい
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

も

もアソミトとお僅の香う舟

いすねのいすねもあすくとてスミシテ

近づれゆくはす本とす秋の懸

是とく卷の名残とつめすてまうまき日くすく
能湯へれりつる卷くとつづくおちうへりくら也陪

まほの文機をもつて首をかぶせて油
ぬ詩じよつ作りあります

張北山林遠府城相逢
多日雅詒清秋深老樹添霜色
夜靜流泉疑雨聲驛馬稀傳都下信
啼猿常動客中情。看隣店商家在豐比塵衢爭利名

いとよきてのれりうらわ
むすめらきほそくらき
あくびぬきよさうあうの雷城だめ事
せうて例の向陽子とおもひれ
藤原の山寺の林のえ

あうの未^タへんてとれ
せき日^ヒくつとて内^{ナカニ}事^トもぐくらわす
ほんととひかわ行^{フリウチウ}厨^クの事^トもくわくまを
終^スくよ似^シけよきわく又例の事^トもくわく

老氏者のふりすりかねまほ盛
きいとく矣あまじきくわゆ

やめにひまつまひづき、もうかく世をばらすかな
うけふのえとまうじて、アハナタカ一様とス
まよ達りよに、運び、ハモ、身の首うちもあた
めあすねや、まよはこの途とおりやのつゝ名村な
つるがの迷くそりとりせ中、命つね生きぬき
とすうえん拂てふともいわくへるては秋くら山か
木のいりや、木のあや、きもに

うらやましき風景
いと山の跡

卷之三

左と右とよきをかくわくへさりふかむれーせんのゆき
くとうじよ、まくらみ水うさゆられがまじてくほく
漆がかりにあわすあとのまくいといふよいから
やくあやかんすはうしやくにあらわしむらわ
よもらうりうもし老すれむれうしやくにあらわし
うきよきとくくうきくうきくうきくうきくうき
うきよきとくくうきくうきくうきくうきくうき
老のゆき、おひそくはくとゆきのゆき
丈山翁ハムルク

此中之水可飲也

史トウリハタモトシ
紫桜ミヒタケルモ

いソラモキの木、ハナの蔓をもや
とくづつての山の、うりね成

はまく。まきすみへひしむき。まく。

あつめつて更幽居よろづの字のくらうかのすほり
わよ少くいはく詩歌のまわりけふうい哥
のはたよまくらしのれほくらとわくいす
くすへる老のあよと風使くよふへるま
れ傳恭の一帖よりおし屋上の鳥よ及かくふとく
うひよわやまうて燕石と十数せし宋人の愚よみをす
ねえとくわすむら人のわくよのうかなとすれあわ

とゞく天より神がおこしる事なく無事にやあて
おなめ駒をとくしつも

安永二年己亥月 壬十二日卯夫也有

詠余白俚

相手のう梅雨時のまゝりて向ふにさりそろ
わづへ能活・サーキリモトスリシオモナリ
モトナリルのりよリカツカツ古うり行くへ
此益うるひよ例の子供の踊るへの間を能くと
人よそのうれてうるうるありされと又ややり
トありてすす出でたりぬ只やどりやり捨てやくと
いよりてそれハ實えきしめ核のとむありやう
とくくよつてうるうれとまくやうすくもありうる
能活へてあれよ負へて思えぬふるあつれと

いもじよしきそ是やよいひ出へさせへてのま
わゆめあとをりに様よ思ふま只こも、とぞり
まさん我よ得てせどいひて取りつせらる余白
あくよよとて清よきよめやうね題号といふ
さと茶の湯トシトといふめ其人いつり

世のやすくにてをとよのみむきは童の茶へ
ア治の都の辰巳それなりてとくハ都の未申
ぬふくへ准う名よ立て濃茶のえのゆきり松の
位よくへてハ圓ひとよハひくられと情へられ
麻くらかさくぬ誠わく合「同」まや人目の中くら
すくらり口切の後ハ「き」名の下地意氣す
月の「一」つてとれといふなとせの人の口す宿戸す
立あらぬりて立名立名のゆきりをとて
沙田岸山房の雪うしゆうひりう其白岸の雪
とくでちよへるわくねうれ店くけてわくやうり
水ハ豆々くろよこうこや一ゆきりくよくく
のハニッねのかよもつて怪いひやとあるのすくね
じねのうきよくうけられかくねつううけられかくね
ちよいとあきれてとくとくおの柄の竹を
直かくとくらハ茶のゆく文字くせうとく
茶せんくくいわくまの津とくひやくんあくぬ
岸くらのうへるわくねハタ部のうれハちうめのう
ふくは五条くらや四条すくやえ長よ待合や
茶すのめくら月と月と月と月と月と月と月と

おもへどりそひてうらはくのくびき昔は
のういぐとすます金の中め縁ハくらの
ま豆くわば万ばく

是が近せ女てまともつりてをかね行はようてあは女あよ
りうきくわくと人のちゆぢようしなのとくとひつかく

・ け君 ウクノ韵

月よくも多きよ いて夜音と浮きよ
神やかこの人とおとて 桜のあよじやといふ。
待てあ因のくはくと あふてモのめハかくす。
曉くはくとのくらは 馬場の坂道のややく。

サガ子 エケノ韵

柿よくはまゆく
つけりの夏のわく
みくこのくわく
豆腐のくわく

凡詠 ヨコノ韵

もくはくすよく
たくりゆのくわく
そむ凡のくわく

翁像贊

高き薄よ浮く 滑稽初て山風

その行りの木槿をひいていふよ人の教る
窓のまく下芭蕉の裁てよく己うなづく

此ゑ／＼に画く梅瘦てそいをもて高／＼
笠と推て旅の宿すまほ おと／＼てむす

詩と推て旅の宿すまほ おと／＼てむす

仰清よ故人うりといひ。いひよ翁故人となりぬ。
それより故人未故人 只せ世人を慕ふとす。

又 ウクノ韵

詩家よ李白／＼て清俊とす。仰門よ仰門して徂命と仰う。
うむことのをよ茶公味／＼まよ豆蔻の酒よあくじ。

公母歌笠同贊

題笠立旅忙吟尋花在客心豈無芳野句可識不言深一

人口 ウクノ韵

物もすらうよそくりつ。ち年の業よそへ考やあらむ。
かうみせ草せりつとも そよのなの字の行と行く。

蛤 アカノ韵

ゆの身の雀ケ／＼。竹の枝よすれ／＼。
今い素々よ鶴よと まうらのゆり／＼さ。

寄閑翁 翁 ウクノ韵

も夏のよよかれて。いよいよの雨／＼こ／＼。

一 もうかの名あやめ、とくとものうらうらひ

よちの節よ書きてあく／＼聯句

波の海へぬきよほへて 桃のりの汐チトモ
年の梅くわきよ落りて やの後よ落キモコト

大艶詔

賀人の手よやくね
片叩くはよあれん

風の吹くはすれり

及くの歴よ思ひとくと、まかはされむ

の下れハ落リ悔りくせよ 刷よ仕事と安

めくわく

の下れハ落リ悔りくせよ 刷よ仕事と安

布袋贊

情ゆ錦の世へ／＼すくと 布の袋のち／＼なりゆ。
梅ハ咲くと物とぞ／＼ あ／＼瘦くと物とぞ／＼

・廻文

さくみつづきて待てやうつこ草

御清ち并辨

嫁の門のりとて立つて居ぬよとくね且みとくへり
妻波女とへ善と鶴安安方とくもく／＼空途／＼ゆき

怪しきなりよのつひの糸屋味角シナガタやもまよはあかごと
とすりて家人クニヒトをまくせのち柄ハサゲを詰めそろう合
坊うりの口すらい

かくも含むあり。口へ申よむくして爲せり。能作より
あてたゞよつててまよへ縁へせひとて苗ちうひより
能作より古へ集よいつて能作がすわすの集より
あふる人の能作よりて能作師のうちよひあすむ
には漫々とすむむにうハ全般の経句をあめど其物
其によすりて化のりの名ひうるえらうとくりた
てきかふりうらうと全く言ひよそひふあじ能作より
能作へ一々とくとく其へかくとくとくの語へてとくの
能作のいとくとくの語へてとくの語へてとくの
いとくとくの語へてとくの語へてとくの語へてとくの
いとくとくの語へてとくの語へてとくの語へてとくの

いろは歌

いろはのア十七家とひて、そぞく六種あらすせ
そよなひてこそつくりぬくうじよ語

和六林子雅伯題俳諧所寄可歌

芭^芭
翁^翁
待^待
得^得
ヌル^{ヌル}
宜^宜
モ^モ
世^世
ニ^ニ
色^色
音^音
達^達
ラス^{ラス}

雪中言懷

今
ヨリ
明
ル
新
花
絵
口

題早梅

國の名二十とく

伊豆伊賀 近江 陸奥 義濃阿波出羽 加賀 壱岐甲斐
安藝 長門 肥後 安房 紀伊 能登 河内 大和隱岐佐渡
財も乞ひ中い引よわくは日ひ更替川をく山をくさり

伊豆三河　伊勢紀伊　加賀　義濃　信濃　丹後　伊予　河波

紀伊出羽
安房
義濃
遠江
山城
隱岐
對馬
志摩

佐渡能登
土佐 薩岐 美濃加賀
近江 伯耆 懿岐
肥前

鶴
「雀」
「鳩」
「鷦鷯」
「鳴子」
「五位」
「鳴」
「鵠」
「水札」

● 县の名十
栗風 栗風 猪 猪 風 風 猿 猿 牛 牛 熊 熊 狐 狐 猫 猫
うりふ 二 ニ いしも瘦す スル 犬 イヌ あくら アクラ 月の ツキノ こと
犬の名十

庚寅六十九歲元日試筆

東風回暖入岳阿 老對尊花樂若何
六十餘齡今得九 人生誰道古來多

そむきいとくす年くわてけしとみの春はまも
ゆりのやゑひを廢せふうにハ春をましゆ遊を休み

あさの葉の音トナリ秋るくわくとすく
四鳥よ人へとくらみの年の市

八體詩

圓平とつゝ門の人妻

其人あけの鶴か行よりおこう

其筋

行御ひくに屋も交ふみ力町

天あ延ひくふの空も立月壁

付言

思ひの物うす

天あ一そぞりるやうねの處す

意

勘當の詫よやういの處う

伊ふるもすくふてそんハ浮世す

伊

ふるもすくふてそんハ浮世す

丈草文跡

傘と刺刀とくわくめの上うなとうなを食え
自慢うううううううううううううううう
鬚ハけとくわ夷广うなり兩ハ衣の袖一やん
うか思ふよいとこうりうてやうますすくう
うくうううううううううううううううう

あうてありと妻ハ翁もアシテワ内翁も女ヲアリ
うりとアリてゐちとタハシムトモ君も阿修

ノリ

正りりい

丈草

体彦太夫

此文所ヨリ得トスルハ

昇の邪广いよテのふのサキ彌

サキニシホ

一、海洲子文

このこう一文古モリヤ中ヨ海洲子文一章あり
柳川氏文才ありて詩と能書と行と仰説又幽寂小作
アセクモアリつる此一章をアリテ折々ニヨリ之ニ又
のうとくさうもあくちくちくおき文草のよきよ
とめて追慕の意ひ助メス

壽考先生傳

壽院

海洲

壽考先生生ゆ山中か坐て人向よ六文ノリつす
一人臺上よ坐して啓爾うへまく笑へば萬の
聲れハ聲アリ只人よびアリ是を莫近よやいも
あうねとも義人よをやされ醒まく人よあくまれ
やもまれハ聲よなまくめくのとあるくまく
いあうねアヌー先生を渠とけ早と記せと
拜まくよ先生や姫姫と義カ年よりし

秋のまよ一度下りサ東サ又トモヨリケモノツク
雨乞ひよゝれ矣アシテ上風あゝトナカク
零悴ヤムトノ須臾ナムハシムニヤ先生
爾カタリそれハハ一せよありて名シムニキヨ
一基の上よ通シテカタシムトヨリ
ノノ産書のいシトありトモヘシ、用よハ立
素敷の青ハシムニヤ先生ハ爾カニアシム
含てつリ先生をスルハ先生も様と含んで
カシムトモレハキシトモヨモクシ一重シテカ
カシムトモレハキシトモヨモクシ一重シテカ
其後古シモ店トスルハ先生ハ此爾カニモ
モ、其後仰時山より登アリテアリハ先生ハ

悼伯母辭是ハ三月の事也。其の後又二月の事也。一月の事也。武藏は旅立つて、まやかして、いよいよ皆
ノ例のすめやうにあつちういのすよあわゆ
あり、やうへなる頃より、まくまくせきうひよ
つけて、まくまくのさへあると、人によつて
庭よみせ侍り、よまくよあらまくなんと
ういへ侍りつれ、ばんねん、まくまくのま
うなまくまくせじむ其の事也。

やうやくまづきわらわくとくとくやうやな
行へれどもわかつてさやまつてよけうやく
まづかとあり下よあやの耕をとのうて上つ
すす在の高くよりさるの画てさよ下向し
さよかよわうよいともとすろたすすす
いうやういや待りんぐは旅のいとよしき
を侍れ、まづくをめうもとよハやりひちう
をじさうとお口事より下りけりといそね
まつすまつかうのて奉りてまづくを
まわトセー其いとあるすうてふくをす
ちりぬお母上をけりめのゆくを九とくま
やくつまみとくをくわよすうをよとやういな
うちてせむ早ううりりくに二方く
まわくくお上うせまくをいし後ハいき
まわく奉れ、かくうりうるくに二方く
今がのやうやよいとあたまをあういと
つくまうとくうと行ま遠く思ひてく
まわくうりうきくもんをいといと只夢
まわく侍、彼のうめせ、室のまちもす
やういつくますよ

魂やくすてやうとうを在

鳥類魚虫の挿

せよ圓宮よりつきへて般鳥獸并虫の

一・経の筒里を下り其が行能をも品を改
ト渡修ちの余、じら度初守トヘテ本

一・蟬す一の羽織と着修本ともの至て向後ハ横麻
一・羽めさは替ヘテ本

一・松虫・鈴虫の如きを筆のうちにて砂糖少と好みその
向後ハ聖山の通事屋をもりて精虫うけ
ヘテ

一・蟬塔を約一車自力の功を以て建立リテ後ハ
之を奉かお頼ムギハ一切いりますく一旦又
熊野へあたり修ム大弊が連して無益のまゝ之後ハ
ニシヘテひよゆきかと参りテ本

一・當面中火を拂一而行つて町、家にのあは次のり
氣きをあき得ハ遠あいすゞり沙川田代ホの水カニ

一・蜘蛛清淨の内やどみくりの網をもり諸虫を捕
事不和の至り以後ハ其場所御意の運上トドキ
ヘテ本

・但禪より協ハ運上不取本

一・蜜蜂の小便高ちよ賣く一箇方の痛なり
之を向後ハせらる一経よ只年六升からもの候をも
相りテ

一・端婦己う短ふの秋憎よまたせ斧をひ諸虫殺
害いノ不和千方百計向後ハ止むかとモ一切い

すすきす

一金魚のすすきす近年こよみに義は御うり作向後
金魚の飾一やういすますく

鉢赤塗は竹籠酒等ますハ

一蛤春暖のうる己か快晴よ下くり樓各を建てゆ甚
そちのうとよ相あらまく向後ハ右脇の普請一切無用
り居宅の板換アレ根つにア用ひナシ
一蝙蝠盆を替アトヨウくわ居夜、人里村主へ仰仰リ
「其主を得たる鳥歎のあくめ、うわくわくの候方
ナメクジ役者ホ相つてめども不亞の至向後ハ立合の
支配をうけ而役候度又つてめくさ本

一音鳴鳥銀玉五色の漆桶を養レバ一ノ耳其也大ちよ
向後ハ竹籠子モ一色の相役勿端縫せ泊ホ一切リ

一白鶲白雀ホ此向い御名を修善年ハ頭アリ白きよ
稀アリトモアロ近年復モ相なりアリトモアロ
モアモ異物の跡い

一氣嫁入の旅モアリ御同スサロ氣の立舛行り
アリトモアロ近ノ年復モ相なりアリトモアロ
天井にて躍たゞ仰アリトモアロ人、妙ヨリ形アリトモ
内ニ二階板の下あるとし盆の中附アリトモアロ
一縁アリトモアロ大酒を好み古事の樂李のアリ尋陽の江
水をもおもへずまし向後一切毎用アリトモアロ
素モテ會合これありタリ一縁一物ヨカアリトモアロ

酒ハ其持主のうけ酒屋にて小買ひへば
一理あり。と四至半のうけ茶を立人を遣して候る
ト金返と拂ひ去らるるトヨウム。右の業柳止ヤ
カクシ。自らの樂。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
一馬の太鼓の音徃還向屋前か憚らず不躊躇の至り畢竟
シテ。榮贈のうけ候。ハいなば抑止ヤ。

但辰巳ハサリ。す。但得。之。の。を。時。の。太。鼓。
ト。合。ヤ。ト。様。相。フ。ト。ミ。ヤ。ト。ト。

一青黒赤黒の。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。當時
病犬の皮沢山より得し早速仕替日トヘ

但右ハ家持ほふの黒の事。一併坐仕召仕の黒
ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
右の冬。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。

組頭よと越度。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。

宝曆九卯七月

玉壺軒記

應菴原楚巾老人之需

行を必。一。深山の中高處の下。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
ト俗を避。ト。耳目ハ。ゆ。の。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。

行人の残一毛了身をもてぬと聞一で今ハむすび
くら人の多きかほひ本にてとよりとせあくうるや
伐木丁の桶屋のやや門のうへたまへ
幕ふ屋の皆戸は田家山莊の凡流うるゆのうなう
四方ハ城下の豐トモハ暁やの笛も雨の日の三味線
近づくぬ方の音うひて我身へもはよ聞ゆきハ撫琴
枚苗みよしのうへかわやそもやう翁の身の
安さと仕官ハリシテよつてこれハ北山移文の悪口
あつてすきハ老ふりて遠き酒ハ剣明う錫
すれど是よりハ俗情節のありて身もて戸枢を
さすがつかりの和氣とれハけ軒玉壺ノ
二字仰頭すれど大車のそん一ゆく
時代言葉をいふ所の頭ゆ仰き老のまく屋とれ
妻の日和ハ及くにとや毎日酒よろと茶よろと
うて佐幸砂肺つたうとらじてハ行旅よ天竺
とうめー市中の壹つ酒の内所と聞合され
里のひこうと古いふうと只せ亭のへ口とく
客うれし内す時代の度きうらうう事の多い
仰あらはりあやとととととととととととととと
仰あはりあやととととととととととととととと
宿大はまうとちうとやうとよもりハ一生の損くと
せすうとくとくとくとくとくとくとくとくとく
夢ハほひくとくとく

くそも家屋へ在りてあらば、庭よ千章の竹に
ありて、寐冥山中よ彷彿たりあらば、ハモリの用よやう
ゆてもうれし矣。奈よせりとそひよ安置をもぐ也す
わづまむ靈陰しやうだすめとぞりたはたの京
きくそくもとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞり
かく五丈堂と吟されし。茶のゆくとそりとぞり
あすかくは白とぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞり
がふきやうの古翠あつぢるあもしもとすちもし
室ハトトモりあく。茶室の障^{ミサカ}よも用をきよ御られ
もく。一鼎の煎茶とてしよひじわよされ
さうやと半拂庵のねぎをすよゆうとてりあわせ
落葉もじゆくたまつりせり

飄
長
者
傳

名亭 説

あは洋ぐる長良川を下て向ほ山魏くに橋梁山なすあ
いあらの景致よりうれ亭と名付る。魏洋の二室を
跨る山間の内に上のれりとも禁せ事用いてしまひん。何を
べしとおもひ

悼ふ一庵 祇

仰盛りよ身、散らばけ廻と世のよきとて六庵の
めおもわぬ。當時蕉門よ後良のやせうさりてどい
きほへ來り。木本の推敲とといどい
のすすみの貞靜ハまども人間を離れてま
世のよきくへなじむ。されど永祖父のねまつといひ
又圓門下よすまへられたひよがーり。ひよがーり
多く撰集しと名をとす。さればしてそよと安のよきく
ちきわくづゆよもとをいひ。アーフレーテンの神
アーフレーテン。西行はやの不足いふ。よきよきの花の
よきよきの花。ハモリゆれと春の追手。西よきて彼
はうれきよもとをいひ。

興自若庵文

よの里はし自若す。わからぬりし自若す。
かみす。一瓢のたほぬよふく。ひそちだり

とあつまつす養武の山ふねに庵をつくし
身自らの二字をなづくまほと號の本庵を
称せりやかのこころをいうてされり又自若
し

タクナヨウナのあたり貸すり

名亭下辭

いづれは此居を行ひて三高亭とよび、すまよまち
りきや只知のいづれやとくわらや人或い三ツのアシハセモ
衣食住と利せんとぞりしてうち月給とくわらひす
くわらやあくまう行ゆりとく
くわらアセ錦とよもせせとやうのよ

長宗寺碑

竹屋のへ忍びじとよはの石よとくあす、をはとくじとく

辭世

病来辭世路 久隱舞津農
八十余年夢驚回曉寺鐘
さのふくらむ思ひておはうのねくやくモレセハシムカ
短命やこれよ、ちくちくやめきの

平安書肆

勝村治右衛門

浪花書肆

河内屋木兵衛

同

東都書肆

須原屋茂吉

同

尾陽書肆

永樂屋東四郎

尾陽書肆

前川六左衛門

同

尾陽東壁堂製本畧目録

上紙摺薄用摺
中好次才出本付

和書之部

萬葉集畧解

辛

伊勢物語

二

古事記傳

墨古今集遠鏡

六

玉勝間

十五

暦朝紹詞解

六

後撰集新抄

六

玉ノ一希

一

神代正語

三

同別記

一

波多みの鏡

二

神壽後釋

二

新古今集抄

五

江戸職人歌合

二

直毘靈

一

美濃の家芭

五

御遷幸長哥

一

萬我の比禮

一

同折添

三

八日引日記

一

王考

一

源氏物語手枕

一

天祖都城辨

一

冠位通考

一

三代調類題

六

和歌五百題

二

經書之部

明季遺聞 四

誹書之部

羣書治要

牧民忠告解

批杷園發句集

四書集註道春点

聖人牧民忠告解

同後編

同上紙

傳子

同類題發句集

同片假名附

常語數

同三日月集

文選李善註

物數稱謂

同麻薈集

毛詩國字辨

律數楊權

同崔芝集

孝經鄭註

眾翁茶史

同五七集

同指解

六諭衍義大意抄

同鳶の眼

服膺孝語

詩集之部

同瓢日記

國語定本

三野風雅

同法々花經

劉向說苑

暢園詠物詩

同隨筆

司考

日下新詠

同七部集 小本

同參註

晞髮偶詠

同二編

同上紙

疇人詠

同三編

同列仙傳

先友詩抄

同四編

韓文起

寒林刪餘

同五編

今世說

金山稿

也有翁鷄衣合本

左傳蒙求

清百家絕句

同後編

星渚堂對問

蒙求標題詠

同續編

木學參解

金城白湯集

同拾遺

論語參解

日本詠物詩

誹譖百人一首

醫書之部

醫家千字文

冢田物

積聚編

痘疹妙藥集

冢註周易

備考方

妙藥手引草

同正文

提耳談

易書之部

同毛詩

溫疫論

增補下篇首第

同正文

藥品考

同文政再板

同六記

古方通覽

同增續

同老子

方書摘要

同大全

左傳增註

十五

經穴秘授

同極秘

孟子斷

二

醫事古言

同卦象解

登錦行

一

吐方撮要

易道早合点

作詩質的

一

物品識名

佛書之部

論語羣疑考

十

同拾遺

觀迦應化畧諺解

大峯文集

七

蘭藥鏡原

宗門畧列祖傳

滑川談

一

醫生堂雜話

金斯幾

隨意錄

十

內外要方

閑居忘草

天文晉學之部

二

同二編

圓戒琢磨訣

天文星風雨考

一

同三編

圓光師御傳畧贊

天文候鑑

一

傷寒論持解

永平道元行狀圖

日用曆談

一

宋板傷寒論

觀音施無畏圖

觀象圖說

三

同正文

現生護念之圖

晴雨管規

一

本朝水種方

菩薩戒童蒙談抄

晴雨考

年々出板一

唐士談語

江尾往還蹤

二

手本物之部

長雄書札集

猿山詩哥帖

正面摺之部

長松貴札帖

同乞巧帖

土由敢才珍孝經

空洞書翰

同年中帖

漢魏隸書帖

大橋遺帖

同尺一集

九疑山碑

同改年帖

同千字文

郭有道碑

同今川狀

同書通案文

義之周府君碑

同池凍帖

同嵯峨名所

渤海藏真帖

同書用集

同四季文集

東坡自我帖

同當用集

同四季文集

李邕沙羅樹碑

同書札集

同江戶川用文

董其昌夫馬賦

同初學手本

同私用集

同衆鳥帖

同かか手本

同清風帖

同秣陵帖

同庭訓往來

二節詩歌撒英

道風草書帖

同風月往來

消息索文

信海三十六歌仙

同明衡往來

定家朗詠

陋室銘

同江戶往來

行成朗詠

篴曲大意抄

同江戶名所

同二輪入

立花當用集

同當時用文章

煎茶早指南

諸禮大學

同早速手字文

神術極秘卷

同上紙

石刻法帖之部

画譜繪手本之部

金氏画譜

朱子廟堂碑

北齋漫畫

士

神事行燈

朱子風雪帖

北齋画譜

三

同二編

宋七君子法帖

同上紙

一

初學画手本

一

歐陽詢九成宮

一筆画譜

一

福善齋画譜

五

子昂要雀帖

兩筆画譜

一

武勇魁圖金

一

同羊公帖

同上紙

一

國二編

徂來大曆帖

英勇画譜

一

筭法之部

廣澤樂得帖

道中画譜

一

本朝筭鑑

三

米元章夫馬賦

浮世画譜

一

開式新法

二

米元章夫馬賦

同上紙

一

玉積通考

三

米元章夫馬賦

同二編

一

點竈指南錄

三

繪本之部

同上紙

同二編

二

繪本漸山科

二

玳琳漫画

一

同三編

三

同庭訓往來

三

蕙齋鹿画

一

同四編

三

同女今川

一

同二編

一

同五編

三

同大江山

一

同三編

一

周髀筭經圖解

五

同彩色入

一

同五編

一

同發隱錄

一

同曾我物語

一

北溪漫画

一

同上紙

一

同咲分勇者

一

文鳳龜画

一

八木龍の巻

一

同上紙

一

人

一

字引節用之部

將慕之部

百文首之部

滿字節用錦字選

將慕道標

棲鳳百人

同中紙

同觀手

同上紙

同上紙

同金襴

同上紙

早字節用集

同鷺孤

同上紙

同上紙

同定跡

同上紙

同大全

同連珠

同上紙

同真字附

同名家友

同上紙

同上紙

同古今集

同上紙

四聲節用集

同相掛集

麗玉百人

同上紙

同指南車

同上紙

同上紙

同百番笑

今様百人

同上紙

同上紙

同上紙

手紙早引集

同自在

同上紙

永樂古狀揃

渡世肝要記

女今川貞操鑑

同上紙

同二編

同上紙

同假名附

同二編

同上紙

初學古狀揃

碁經奕範

秉穗錄

同上紙

同奕筌

同二編

同假名附

碁立手談

彼此合府

同上紙

延壽養生談

一

東都書物問屋

大日本國郡全圖

二

尾州名古屋本町通七丁目

江戸日本橋通本銀二丁目

永樂屋東四郎

濃州大垣本町

同

入

出

店

早稻田大学図書館

011688990990